

町史

とっておきの話

268

只見町総合政策課

中野 陽介

只見ユネスコエコパークがめざすもの①

▼今月号から六回の連載で、ユネスコエコパークを特集します。
▼執筆は、担当者で森林生態学に造詣の深い中野陽介さんです。

▼只見ユネスコエコパークを詳しく具体的に紹介していきます。



▲豪雪が育んだ自然環境と伝統的な生活・文化が認められた只見ユネスコエコパーク

只見町とユネスコエコパーク 二〇二四年六月、只見町の全域と檜枝岐村の一部地域が、ユネスコ（国連教育科学機関）から「只見ユネスコエコパーク（Tadami Biosphere Reserve）」に登録されました。この地域が豪雪に特徴づけられた豊かな自然環境と生物多様性をもつとともに、その自然環境に育まれた伝統的な生活・文化や歴史が残る地域であると国際的に認められたということです。これは、ぜひ町民の誇りと自信にいただきたいと思えます。しかし、登録は最終目的ではありません。ユネスコエコパークを枠組みとした「豪雪に育まれた自然環境、生活・文化を守り、活かす」精神のもと、過疎高齢化の中にあっても持続的な地域の堅持と発展をめざそうとする町の決意と覚悟でもあるのです。この目標を達成するためには、登録による

一過性の効果ではなく、五年、一〇年先を見すえた、地道で、継続的な取り組みが重要となります。ユネスコMAB（マブ）計画とユネスコエコパーク ユネスコエコパークは、「人間と生物圏（Man and the Biosphere：略称MAB）計画」の中心事業である「生物圏保存地域（Biosphere Reserve：略称BR）」のことで、産業革命以降、人間の活動が自然環境を破壊・変質させ、われわれ人類を含む生物全体の生存基盤を脅かしてきました。そこで、一九七〇年、ユネスコが人間と生物圏（生物が存在する領域）と調和が取れた関係を築き上げるための調査・研究や情報交換を行う多国間協力事業として立ち上げたのがMAB計画です。生物圏保存地域は、自然環境と生物多様性の保護・保全を図り、自然環境と資源を持

続可能な形で活用することによって地域社会の経済的發展を目指すモデル地域として、一九七六年に開始されました。日本ではより親しみを持つてもらうために「ユネスコエコパーク」と呼ぶことが日本ユネスコ国内委員会により決定されています。

ユネスコエコパークの三つの目標

ユネスコエコパークの目的である「人と自然との共生」を実現するために三つの目標があります。①自然を守りましょう、②地域資源を絶やさず活かしながら地域社会を発展させましょう、③これらを達成するために学術調査と研究をすすめる人材を育成しましょうというものです。また、この三つの目標は、互いに独立しているのではなく相互に補完するものです。

只見町がユネスコエコパークに取り組む背景と経過

過疎高齢化が進む只見町では、地域社会の衰退が危ぶまれていました。そうした中、二〇〇二年から三か年にわたり河野昭二京都大学

名誉教授を中心にブナ林の総合学術調査が実施されました。その結果、只見町のブナ林の学術的な価値が初めて明らかになりました。その後、只見地域が世界遺産検討委員会内で国内候補地の一つとなりました。また、世界ブナサミットも二度にわたって開催し、ブナを軸とした様々な施策が展開されました。二〇〇六年には、「ブナと生きるまち、雪と暮らすまち」という表題で第六次只見町振興計画が策定されます。いままでの都市に追従する地域振興とは決別し、町の特性を活かした施策が打ち出されたのです。翌二〇〇七年には「自然首都・只見」が宣言され、「只見町ブナセンター」が発足しました。しかし、二〇一一年、福島原発事故が発生、続いて新潟・福島豪雨が町を襲います。そこで懸案の過疎高齢化と災害復興に取り組むなかから、ユネスコエコパークを選択し登録作業へと動き出すことになりました。その後、様々な手続き、障害を乗り越えて、只見ユネスコエコパークが誕生したのです。